

白レグ・名古屋種・三河種 — 太宰府の養鶏の歴史

現在、太宰府中学校が建っている場所は、以前に福岡県の種鶏場があった所です。種鶏場とは、良質な卵を産む健康な鶏を生産し、養鶏農家などに供給するための施設です。鶏卵の供給を輸入に頼る現状の打開を目指す国の鶏卵増産計画を受け、福岡県は昭和4（1929）年、太宰府町から寄附された銚^{はら}の浦の土地に、先進地の名古屋や熊本^{きん}の施設に劣らない、18、19棟の鶏舎を持つ規模の種鶏場を開いています（『福岡日日新聞』）。名古屋種や三河種といった国内の代表的な鶏だけでなく、白色レグホンは米国からも卵で取り寄せて試験が始まりました。この種鶏場は、昭和54年に筑紫野市吉木に移転するまでの50年間、同地において優良種鶏の研究開発に貢献することになります。



養鶏ともなると、ある程度まとまった数の鶏を扱うことになりますから、飼育に際してはしっかり管理しないと、他人の田畑に飛翔して作物を食害し被害者より往々不平を訴えられてトラブルに発展することもままあったようです。それが原因か、太宰府町では、町内の養鶏が禁止された時期がありました（『太宰府市史』）。具体的な政策の後押しが無くては、定着しにくい事業であったのかもしれません。昭和時代に入ってから県の種鶏場の設置は、養鶏の本格的な普及に大きく影響したと思われます。

昭和10年頃、水城村尋常高等小学校が作った教師用指導書『我校の郷土教育』

では、児童に郷土の認識を深めさせるための遠足の候補地の一つとして、すべての学年向けに太宰府町の福岡県立種鶏場を挙げています。遠足の目的には、郷土について児童に誇りを持たせることもありましたので、きつと種鶏場の堂々たる研究施設と広大な鶏舎は絶好の教材となると考えられたのでしよう。

養鶏は、明治時代から農家の副業の一つとして奨励されており、水城村では、明治35（1902）年ごろに作成された『村是』^{（せんぜ）}（村の産業振興策を記す）にも奨励すべき事業として養鶏が掲げられ、当時は他の町村へ移出できるほどの生産があったようです。しかし

古代山城と大宰府(1)

さんじょう

私はこの欄で何回かにわたって、古代大宰府の軍事的機能を考えてみました。今回も引き続き、その一環として、古代山城をめぐる問題について考えてみましょう。

大宰府の軍事的機能を考えるうえで重要なのは、やはり白村江敗戦後の天智天皇3（664）年、（664）年、吉岐・対馬・筑紫国などに設置された防と烽、また同年、筑紫に築造された水城、そして翌年の大野城・椽城（じょう）の築城でしょう。

これらは『日本書紀』に記されており、大宰府は防人の配備、烽の運用および管理、また大野城・椽城、水城などの防衛施設の統轄といった軍事的機能を付与されたと考えられるのです。ここにみえる大野城・椽城は、これまで古代山城のなかでは、対馬の金田城（かねだ）、熊本の鞠智城（まりち）、香川の屋嶋城（やじま）、奈良・大阪の高安城（たかやす）などとともに朝鮮式山城の名称で分類されてきました。一方で、瀬戸内地域から北部九州にかけては、いわゆる神籠石系山城と呼ばれるものが分布しています。この神籠石系山城は、その性格（靈域説か、山城説か）をめぐって、明治時代に論争が起りましたが、現在の研究段階では、朝鮮式山城と神籠石系山城とを合



わせて古代山城と呼ぶことが、ようやく一般的になってきました。さて、この天智朝には、那津（博多）から現在の政庁跡に大宰府が移転したものと考えられており、この時に先に述べたような軍事的機能が付与されたことから、大宰府は軍政府として成立したと説かれることもあります。確かにそうした側面があることも一概に否定できませんが、その後における大

宰府の軍事的機能の展開を考えてみると、この時付与された軍事的機能は、まさに白村江敗戦という国家存亡の危機ともいえる事態に即応するための緊急的、臨時的措置とみることもできるのではないかと思います。

それは令制にみえる大宰府が「那津官家」、筑紫大宰、筑紫総領など、さまざまなプロセスを踏みながら段階的に整えられていったと考えられるからであり、そのことを念頭において、天智朝における軍事的機能の付与を、一旦相対化してみることも重要ではないかと思うのです。そうしたことを踏まえたうえで、先にふれた古代山城のあり方を再検討してみる必要性もあるのではないかと考えています。

あまのとおかげ 天野遠景の貴海島討伐

これまでバックナンバーで紹介した以外に、天野遠景は、源頼朝の命令で太宰府に赴任していた間に、もう一つ重要な役目を果していました。それが今回取り上げる貴海島の討伐です。

貴海島は、史料では貴賀井島・鬼界島などとも記され、その現在地には諸説ありますが、近年は鹿児島県の硫黄島（鹿児島郡三島村）とする見解が一般的です。硫黄島は薩摩半島の先端から約40km南の海上に位置する小さな火山島で、硫黄を産出することでも知られています。中世には、貴海島といえは日本の西の境界に位置する島と認識され、また罪人を島流しにする流刑地でもありました。

文治3（1187）年9月、頼朝の命を受けて、その家臣である御家人の宇都宮信房が九州に向かいました。この時、頼朝と敵対していた弟の源義経に味方する者たちが、貴海島に潜伏しているとの疑いにより、これを討伐せよと頼朝から命令が出されたのです。信房は遠景と合流し、出兵の準備を進めます。

翌4（1188）年2月には、遠景からの書状が鎌倉の頼朝の元に届きます。これによると、遠景は家来を貴海島に送って現地を偵察させる一方で、九州の御家人らに出陣を催促して軍勢を集めていました。しかし、御家人たちの協力は思うように得られず、軍勢が集まらないので、あらためて頼朝から命令する文書を出してほしいと頼んでいます。

それから3カ月ほど経過した5月に、再び遠景からの連絡が頼朝の元に届きました。遠景らの軍勢が貴海島に渡り、敵と合戦をして降伏させたという報告で、とりわけ信房が活躍した旨が記されていました。このようにして貴海島討伐は完了しました。

戦いの詳しい内容は記録が残っておらず不明ですが、これにより鎌倉幕府の威令は当時の日本の西の果てまで及ぶようになりました。その後、頼朝は参加しなかった御家人たちから領地を没収し、これを信房のように功績のあった者に褒美として与えています。



おおとり いし 大鳥居氏の家督争いと菊池氏 きくち

室町・戦国時代を通して筑後国（現・福岡県南部）に在住していた太宰府天満宮の現地トップ・留守職を務めた大鳥居氏は、太宰府が位置する筑前国（現・福岡県北西部）と筑後国の両方で、国ごとの統治担当者・守護を中心とする武家と関わりを持っていました。今回は、筑後守護・菊池氏との関係をみていきます。

15世紀半ばの大鳥居氏と菊池氏の関係は、大鳥居氏の家督をめぐる抗争に菊池が介入する形で現れます。信善・信顕・信堯の三兄弟によつて争われた家督は、文安元（1444）年に信堯が継承することになった決定します。しかし、その後も信顕との間で、数年にわたって家督争いの火種がくすぶり続けました。

それから4年後の文安5（1448）年、信顕が家督争いの経緯を説明した際に、文安元年当時、「故上様」から裁定があったと述べています。この故上様とは、菊池氏の当主であった菊池持朝のことです。筑後守護を務めた菊池持朝は、同国水田荘（現・筑後市水田）に



大鳥居氏が在住していたことから、上位者として家督争いの収拾に乗り出したのでしょうか。また、信堯の家督相続が決定した直後に作成された神仏に契約の履行を誓う文書・起請文には、菊池氏の本拠・肥後国（現・熊本県）の国内最上位の神社・一宮であった阿蘇神社の名が、太宰府天満宮や筑後国一宮の高良大社とともに記載されています。ここからも、菊池氏の密接な関与がうかがえます。

この当時、北部九州地域では戦乱が続き、筑前守護に任命された経歴のある大内氏と少貳氏は、筑前国における権力基盤が不安定で、争いを裁定できなかったと考えられます。そのため大鳥居氏は、自らが在住した筑後国の守護であった菊池氏の裁定を仰いだのです。肥後国と筑後国を権力基盤とし、本来は直接の関わりを持たない菊池氏が、天満宮領を通じて太宰府天満宮と関わりをもった例であるといえるでしょう。

元 太宰府市公文書館 兒玉 良平

公文書館のはなし

太宰府市公文書館が開館10周年を迎えました。といっても「公文書館？どこにあったっけ？」と首をかしげる人もいるでしょう。一般に図書館や博物館ほどおなじみの施設ではありませんが、公文書館はアーカイブズともいい、公文書館法には、歴史資料として重要な公文書や地域資料を保存し、閲覧に供するとともに、これに関連する調査研究を行うことを目的とすると定義されています。



書館は1971年に開館しました。以降各地に少しずつ増えていきますが、2000年代に入り、公文書の誤廃棄やさまざまな管理などの問題が噴出し、2009年に「公文書等の管理に関する法律」が公布されると、その後15年の間に40を超える公文書館が開館しました。専門職であるアーキビストの認証制度も始まり、世間の認知度も徐々に高まっている状況です。現在、全国に公文書館の役割

アーカイブズの起源は、紀元前7世紀頃のアッシリア帝国の王立図書館とされています。ただ18世紀以前のアーカイブズは、国家や宗教団体、家などのコレクション的な性格が強く、公に開かれた施設ではありませんでした。そうしたなか1808年、フラン

ス革命後に設置されたフランス国立中央図書館は、公文書を国民の共有財産として保存し、閲覧公開していくという理念と仕組みを有する、世界初の近代的な公文書館といわれます。その後、世界各国で同様の公文書館が開館しました。

国内では、1959年開館の山口県文書館が最も古く、国立公文

書館ならではの強みもあります。

地域資料はもちろん、市政の記録である公文書は、フランスの例をあげるまでもなく、市民の貴重な共有財産です。それを守り、次の世代へつなげる努力を、太宰府市公文書館は続けています。

太宰府市公文書館 おぎの 寛美

まちの還暦を祝う

昭和28（1953）年9月13日、太宰府町は町制施行61周年を祝う記念式典を挙行了しました。このお祝いは、明治21（1888）年の市制・町村制の制定後、明治25年に太宰府町が誕生してから61年が経過したということで、人の還暦になぞらえて企画されました（ただし人の場合は通常数え年で祝います）。

この頃は、福岡県で昭和25年から始まる町村合併運動に揺れる時期でもあり、渦中の太宰府町にとっては、町の歩みを振り返る節目として格好の機会だったと思われます。

当時の太宰府公民館報によると、町では9月3日に行事実行委員会を立ち上げ、記念行事のプランニングを行ってあります。目玉の一つは、それ自体が町発展の試金石となることを目論んだ、工芸品から衣類・食品まで含んだ町内の製造品全てを出品する「産業文化大展示会」の開催でした。これに先立ち、町議会では追加校正予算として記念事業費が承認されます。しかし、この年6月に北部九州を襲った豪雨により太宰府地域も被災。そのた

め記念事業に組まれた予算は15万円とかなり規模の小さいものでした。町議会で町長も、財政上やむなく留めたと説明しています。祝賀計画がどの程度まで実現できたか詳細はわかりませんが、町の将来を見据えた行事として、町全体で盛り上げようとする雰囲気を感じることができま

す。
事業の一環として翌年に刊行された61周年記念誌『太宰府1954』



には、記念式典や自治功労者・納税功労者らの表彰の写真が収録されています。記念誌に掲載されたプログラムによると、太宰府天満宮境内に開催したばかりの公民館で開催された記念式典後に太宰府天満宮文書館で祝賀式を行い、午後から会場を再び公民館に戻して各区持ち寄りの演芸会や映写会が行われたようです。また、この日のために用意された慶祝歌（元太宰府天満宮宮司・西高辻信貞氏作詞）を歌いながらの、小学校生徒による旗行列も披露されました。

昭和30年、太宰府町は水城村と合併、新太宰府町が生まれます。

太宰府市公文書館 藤田 理子

古代山城と大宰府(2)

本年6月号で、古代山城と大宰府の問題をとりあげました。今回はその続きです。前回、従来は大きく朝鮮式山城と神籠石系山城に分類されていたものを合わせて古代山城と呼ぶのが一般化してきたことにふれました。ただ、やはり朝鮮式、神籠石系という分類には根強いものがあります。特に1980年代の研究では、文献史料に記載のあるものが朝鮮式、一方で記載のないものが神籠石系との考え方が出てきて、現在の古代山城関係の論文でもしばしば目にします。文献記載の有無について、古代山城研究会代表の向井一雄^{むかい かずお}さんは、この基準による分類の固定化が山城遺跡の多様性を見失わせたといえます。さらに文献未記載は、神籠石の定義にはまったく含まれていなかったもので、神籠石という分類が本来もっていた考古学的な意味あいが失なわれていったと指摘します。

そもそも神籠石とは山腹を取り囲む切石の列石のことを指しており、その列石を土留めの根石^{ねいし}として版築^{はんちく}の土塁がとりつき、前面に木柵を備えること、また水門や城



門が付随する場合もあることが発掘や踏査によって明らかになってきています。向井さんがいうように、そのありかたはきわめて多様で、文献未記載というだけで括れるものではありません。

向井さんはさらに、80年代の研究によって、以前の年代論・築城主体論が振り出しに戻ったとも指摘しています。つまり、いつ築城されたか、そして誰が主体となつて築城したかという問題です。現状では、築城年代はおおよそ7世紀初頭～8世紀初頭に集約されつつあり、一方、築城主体は中央国家か地方豪族で学説が分かれています。このことは、古代山城と大宰府との関係にとっても重要な意味をもっており、時期と主体のありかたによっては、両者の関係の再検討も視野に入ります。近年、古代山城の発掘調査も進んできたことから、その成果も取り入れつつ、この問題を考えることが求められています。

太宰府市公文書館 しげまつ としひこ
重松 敏彦

あまのとおかげ 天野遠景の後任をめぐる

本年2月号で触れましたが、天野遠景は建久5（1194）年ごろまでに九州を統轄する鎮西奉行の職を解任されています。その後、鎌倉幕府は誰を太宰府に派遣し、九州をどのように統治したのでしょうか。この問題については、古くから研究者の間でさまざまな異なる意見が交わされてきました。そこで、今回は3つの説を紹介し

ます。

①中原親能説 遠景の後任として、中原親能が鎮西奉行に任命された説です。親能はもと京都の公家くげで源頼朝の側近となった文官です。京都の朝廷と幕府との交渉役を務めることが多く、遠景が解任された後も親能は京都にいて、太宰府には赴任していません。また親能には九州で遠景のような大きな権限はなかったという指摘もされています。

②武藤資頼説 遠景の後任は親能ではなく武藤資頼だとする説です。武藤氏はもと武蔵国むさしのくに（現東京都・埼玉県と神奈川県の一部）の武士で、頼朝に従うようになって発展しました。資頼は建久6（1195）年以降に太宰府に移ったと考えら



れ、その頃から頼朝により筑前国ちくぜんのかみ（現福岡県西部）・豊前国ぶぜんのかみ（現福岡県北部・大分県北部）・肥前国ひぜんのかみ（現佐賀県・長崎県のうち壱岐・対馬以外）・対馬島しま（現長崎県）の守護に任命されました。なお、資頼には、それらの国々に限らず、鎮西奉行に由来する九州全域に及ぶ権限があるという意見がありますが、その権限は遠景が持っていたものに比べると非常に小さく、鎮西奉行だった根拠にはならないという反対意見もあります。

③親能・資頼複数就任説 ①②に対し、遠景の後任として親能と資頼が並び立つ形で鎮西奉行に就任した説があり、親能の後は養子である大友能直おとものちかとその子孫が引き継いだとされています。しかし、大友氏には九州全域に及ぶ権限はないとして否定する意見もあります。

このように、歴史は決して自明のことではなく、複数の説が唱えられて論争となり、なかなか決着がつかない場合もあるのです。

太宰府市公文書館 大塚 俊司おおつか しゅんじ

太宰府の文華と公文書館だより

129

おおとり いし おおうち し
大鳥居氏と菊池氏・大内氏

ページID : 7241

15世紀半ば、太宰府天満宮の現地のトップである留守職を務めた大鳥居氏の信善・信顕・信堯三兄弟による家督争いには、筑後国（現・福岡県南部）守護の菊池氏が関与していました。この争いについては昨年8月号で紹介しました。今回は大内氏の関与に注目してみます。

この文安年間（1444～49年）の大鳥居氏家督をめぐる争いは、菊池持朝の裁定もあり、信堯が家督を継承することになった沈静化しますが、和解の際の取り決めを信堯が守らなかったことから信顕が反発し、家督争いが再燃します。この時、信顕は再び菊池氏を頼り、持朝の子・菊池為邦から直々に文書を受け取ることで、信顕に家督の地位が保証されました。

一方で信顕はそれに先立って、筑前国（現・福岡県北西部）守護となった大内教弘を頼り、家督の保証を得ていました。実際、博多に信顕側・信堯側双方の証人を招集して、大内氏による裁判が行われていたようです。さらに、大内氏の筑前の代

官である守護代・仁保盛安と、菊池氏の筑後の代官である守護代・木野了幸は連絡を取り合い、大鳥居氏の家督争いの裁定について相談し合っていました。

あくまで菊池氏は筑後国の守護であり、筑前国内に位置する太宰府天満宮の人事に直結する、大鳥居氏の家督争いを裁定することは、ある意味、越権行為ともいえることでした。そのため菊池氏は、友好関係にあり、かつ筑前国の守護となっていた大内氏に協力を仰ぎ、自らは大内氏の決定を追認する形をとったのでしょう。実際、これ以降の大鳥居氏に関わる権益を保証する主体は、いずれのケースでも大内氏となっています。大鳥居氏としても、天満宮での権益を守る上では、筑前守護の大内氏から権利の保証を受ける方がはるかに実用的であったでしょう。

以上のように、各武家権力の思惑の間で、天満宮をめぐる情勢は展開していました。そして、大鳥居氏ら天満宮の社家も、自らの権益を守るために、武家権力を利用していたのです。

学問の神さま

ページID：7241

受験シーズン到来です。太宰府天満宮の境内には、合格祈願の絵馬が数多く奉納され、受験生らしき姿が目立ちます。おなじみの光景ですが、古い新聞記事を調べてみると、受験生たちが天満宮へ押し寄せるようになったのは、昭和30年代末のようです。それまで2月の天満宮に関する記事は梅見の話題がほとんどでしたが、昭和32年2月に「太宰府天満宮の受験シーズン」という記事が出現します。そして、昭和37年以降は受験生でにぎわう天満宮の記事が毎年掲載されるようになります。当時、国内は高度成長期。高校や大学への進学率が急速に高まり、その競争の激しさは「受験戦争」や「試験地獄」とも称されました。受験生たちが「学問の神さま」の助けを借りたいと思ったのも当然といえます。

その学問の神・菅原道真は、死後、天満大自在天神として神格化されます。平安時代中期ごろから、和歌、漢詩、書に優れていた道真の才能を慕い、その加護を得て詩文の向上を願う人たちが、天満天神を「文

道大祖風月本主」、つまり文道の神として崇めるようになります。鎌倉時代以降、天神講や天神縁起などを通じて天神信仰はさらに普及します。江戸時代になると、寺子屋を中心に庶民の間でも天神信仰が盛んになります。寺子屋では天神画像を掲げ、天神経を唱えるなどして、学業の上達を祈りました。芝居小屋でも、近松門左衛門作『天神記』や、『寺子屋の段』で有名な『菅原伝授手習鑑』などの浄瑠璃・歌舞伎が人気を博し、こうした娯楽を通じて「学問の神」としての天神さまが浸透していったと考えられます。

ところで、学問の神・菅原道真も受験を経験していることをご存じでしょうか。18歳の時に文章生試を、26歳の時には「対策」という官吏登用試験を受験し合格しています。「対策」の前は、私生活の時間を減らし猛烈に勉強したといえます。受験の先輩と考ええると、学問の神さまが急に身近に感じられるので不思議です。